

長野大学の野見教授が唱える「限界集落」とは、今後十年以内に消滅する可能性があるある集落を意味する。少子高齢化による人口減少や財政難で集落としての機能が維持できなくなる。危機的状況である。国土交通省の調査では、こうした集落は全国で四百二十

集落が消えてゆく。いったいどういうことなのか。グローバル化によりポスト工業社会へと産業構造が激変したことが根本にある。学歴や能力に見合った就職先が少ないため、多くの若者が本意ながら集落を去る。物質的に豊かな生活や人生を求めた第二に、統廃合を受け入れたとしても、問題の本質が変わらず存在しているため、またすぐに限界集落になることが見えているからである。「統廃合したら悪循環。人が入ってこないから抜けていく。活性化しないから離農する。離農するから活性化しなくなる」(住民からの聞き書き)

限界集落

十三、九州で五十三と見込まれている。集落から村人がいなくなる。実に驚くべき現象で、ときに恐怖すら感じる。脈々と続いてきた集落には、さまざまな天災や人災を、集落の人々の協力によって乗り越えてきた長い歴史がある。栄枯盛衰があるとはいえ、強

二〇〇五年から〇六年にかけて、北海道内の限界集落の候補地を調べた。主要産業は農業。集落の住民たちは隣の

問題は何か。それは、古くて新しい問題、家業である農家の後継者問題であった。